

佳作

そらまめの降る丘へ

諧謔風

そらまめ【空豆】

マメ科の二年生作物。一年生作物に対して先輩面をすることもある。一年生作物はそれを快く思わないというのが通説であるが、翌年には次の新入生作物に対して同じ態度をとることが広く知られている。葉は羽状複葉。羽状複葉の読み方及び原産地は未詳。そらまめが降るといふ丘は今なお未踏。気が向いたら探してみよう。「この一が目に入らぬか!」

注…「そらまめ」の辞書的解釈については、他の辞書を参考のこと。

ナポレオン辞苑第六版より

「そらまめがどつして『そらまめ』なのか知ってる?」

レネットは尋ねた。台風に吹かれたみたいに裏返ったこうもり傘をさして、そいつを肩に傾けて。サイズの合わないがぶがの長靴を履いて、一歩ごとにばこいわせて。誰に尋ねたとか、誰が答えたとかそんなことは問題ではない。とにかくレネットが問いかけた相手は不正解を口にして彼を不機嫌にし

た。きつとその誰かさんは辞書をめくって「空豆」の項でも参照したのだろう。辞書なんてものにはろくなことが書かれていない。なぜなら辞書は嘘をつかないから。嘘をつけないからだ。正直者であることと嘘がつけないことはまったく違う。三百六十度正反対だ。一回転していることは問題ではない。とにかく前者は美德であり後者は欠陥だ。前者との会話は有意義だが後者との会話はまるで退屈だ、とレネットは言う。だから彼は辞書を読まない。辞書の上に拠る言葉に耳を傾けない。不機嫌に傘を傾げるだけだ。なぜなら世界は正しくあるよりもむしろ楽しくあるべきなのだから。

しかしそんな彼にも、めくってみたい辞書というものがこの世にただひとつだけあった。その辞書は「わたしは『不可能』などという文字は存じませんよ」などという自己矛盾を口にして、一人の男を栄光と破滅に導いた。ナポレオンの字引。もし辞書が「不可能」の字を隠すならその辞書はきつと嘘つきであり、したがってその辞書全体が全く信用ならないはずである。それが証拠にナポレオンが恋人ジョセフィーヌに送った数多くの恋文は、例外なくスベルミスまみれ。ナポレオンは辞書に、

辞書にだまされたのだ。それは愉快的な辞書だった。そんな辞書を物差しにして世界を測ることができたなら。きっと英雄になれるに違いないとレネットは空想したものだ。いつかナポレオンの辞書を探しに旅に出よう、と。だから彼の机の脇にはいつだってちょっとした旅支度を備えたちいさな鞆が置かれていた。伝説の辞書が二泊三日で見つかるつもりでいた。彼は「不可能」という言葉を辞書で引かなかった。

レネットがおちよこになった傘をさし、靴擦れに悩まされながらもサイズのあわない長靴でばこばこ旅をするはめになったのはしかし、ナポレオンの辞書のためではなかった。

「そらまめがどつとして」「そらまめ」なのか知ってる？

それはね、そらまめが空から降って来るからなんだ。

この世界のどこかにはそらまめが降る丘があって、
そこでは毎日のようにそらまめが降るんだよ」

実際のところレネットの好物は他ならぬそらまめで、三度の飯よりそらまめが好きで、三度の飯よりそらまめが好きなのに三度の飯にそらまめを喰うという矛盾さえ厭わなかった。彼はおやつにもそらまめを喰った。

「だって、ミカンを食べ過ぎたら手が黄色くなるでしょう。でも、そらまめは食べ過ぎても緑色にならないんだ」

と、彼は自己弁護する。

「もしもそらまめが僕を緑にするなら、僕はとつくに雨蛙さ」

しかしそらまめの食べ過ぎがレネットに悪さをしなかったとしても、そらまめの方に見れば全く問題無し、とはいかないのだった。なにしろレネットはそらまめと見れば片端から捕まえて喰ってしまう。三度の飯にはおるか、おやつにさえ喰ってしまうのだ。さらに悪いことに彼は午前中にも間食をした。喰うのはもちろんそらまめである。このままでは一族郎党根絶やしだぞと無い肝を冷やしたそらまめの長老は、生き残りの者たちを呼び集めた。そらまめたちは、そらまめ史始まって以来のこの窮地をどう乗り切るかと議論に花を咲かせ、その花が実らせたそらまめたちがレネットの家から大挙して逃げ出したのである。

かくしてそらまめたちの逃避行は始まったのだが、いかんせん彼らは小さすぎる。いかにレネットが小柄だとはいえ彼とそらまめの歩幅には歴然たる差があった。そもそもそらまめには足がないのだから。一步分の歩幅とゼロ歩分の歩幅はたとえ何倍しようとも永遠に埋まることはないのだ。

いずれ必ず追いつくだろう、とレネットは高をくくっていた。彼とそらまめとを隔てているのは一步分をたったゼロ回繰り返せば取り戻せる距離なのだ。しかしいくら追っても追いつかない。辿るべき足跡は見つからず、いつまでたってもそらまめの背中は見えない。なぜならそらまめに足は無く、そらまめに背中は無かったのだから。そしてレネットは足跡を辿り、背中は

追う以外に逃げ出したものを追う術を知らなかった。かくして
 そらまめたちは恐るべき捕食者の手から、口から、胃から永遠
 に逃げおおせたのである。

レネットはそらまめを失った。(★)

そらまめを失ったレネットは毎日泣き暮らした。悲しみのあ
 まり大好物のそらまめすら喉を通らず、それはつまりそらまめ
 の必要がないということなのだけれど、そんな矛盾にも気づか
 ないほど嘆きの淵に沈んでいた。沈んでも沈んでも、嘆きの底
 は見えなかった。幸いなことに彼はこれまで一度も嘆きの底と
 いうものを見たことがなかった。見たことはなかったが、きつ
 と底はあるのだろう。もしも嘆きに底がないのだとしたら、彼
 の嘆きはみんなみんな流れ出して何処かへ消えてしまうはずな
 のだから。

だからレネットのポケットにはいつも針が一本入っている。
 いつか嘆きの底にたどり着くことがあったなら、ぶつりと穴を
 空けてやろうと。嘆きを全部、流してやろうと。嘆きの底はび
 んと張りつめていて針で突けば風船のように割れるに違いな
 い、とレネットは確信していた。確信してポケットに手を突っ
 込み、針は彼の指先を突いた。空は晴れ渡って、しかし憂鬱な
 心みためにブルーだった。

「迷いそらまめ、探します」

とんがった耳、黒い鼻、茶色い毛並み、黄色い生地に黒の足
 跡模様の首輪などはありません。名前を呼ぶと返事をしません。
 とてもおとなしいそらまめです。

見かけた方は逆さ傘の下レネットまで。お礼、いたしません。

「A」字路の横棒にあたる分かれ道には電信柱が立っていて、
 レネットはその無闇に傾いた電信柱に迷いそらまめを知らせる
 チラシを貼りつけた。見回す限りあたりに電信柱はこの一本だ
 けで、何者とも連絡しない電線が垂れ下がって火花を散らして
 いた。それは寂しい光景だった。貼りつけたばかりのチラシを
 剥がしてずびびりと鼻をかみ、目尻の涙を拭いた時だった。レ
 ネットのすぐ後ろをふたり連れの魚介類が歩いていった。彼ら
 は海に棲む魚介類にしか分からないしよっぱいジョークをいく
 つか飛ばし、互いに再会の約束を交わしたあとで別れた。一人
 は横棒へ、一人は「A」のてっぺんのとんがりへと。「A」字
 路で別れた彼らは結局前後して同じ道にたどり着くことになる
 のだが、そんなことは問題ではない。大事なものは彼らの別れ際
 のセリフだった。魚介類たちはこう言ったのだ。

「それじゃあ、次はそらまめの降る丘で」

「そらまめの、降る丘で」

そう言うって彼らは無い手を振ったのだった。
「そらまめの……降る、丘？」

慌てて振り返ったレネットは魚介類一方の肩をつかんで引き止めようとしたが、なにしろ魚介類には肩が無かったので引き止めることは出来なかった。

慌てて追いかけたレネットはもう一方の魚介類の袖を引いて立ち止まらせようとしたが、なにしろ魚介類には袖が無かったので引き止めることはできなかった。

レネットは肩をつかむか袖を引く以外に去り行く魚介類を引き止める術を知らず、かくして魚介類と「そらまめの降る丘」に関する手がかりはレネットのもとから永遠に逃げおおせたのである。

「そらまめの降る丘って、何なんだよ……」

魚介類去りしあとにはガラス色の鱗が一枚残された。教会の鐘が十二時を告げていた。そらまめ好きの王子様はガラスの鱗を拾い上げると、それを落として去った美しい魚介類のことを思った。シンデレラは生臭さを消すために灰を被ったのだろうか。魔法使いの真昼の魔法は、貧しい少女を魚に変えるだろうか。蛙に変えるだろうか。鱗を右手に混乱を左手に、レネットは帰るに帰れなかった。

手のひらにちょこんと乗った小さな鱗をレネットは暫く見つめていた。まるでそこに魚介類とそらまめの降る丘に関する詳細な資料でも書かれているかのようにじつくりと眺めた。

それからふう、とひとつ溜め息をつくくと、彼はその鱗を自分の瞳に押し込んだ。

それはとりわけ可愛い鱗ではなかったから、そらまめほど可愛いわけでもなかったから、目に入れても痛くないというわけにもいかない。全くいかない。いたく痛い。この鱗が目に入らぬかと言われたら、入らない。ごめんなさい。御老公ごめんなさい、とレネットは涙を流す。ぼろぼろ溢れた涙と一緒に鱗は再び彼の手元へと転がり落ちた。とたんに彼の痛みと嘆きとは何処かへ消え去り、代わりに明朗な思考と希望とがやって来た。まるで目から鱗が落ちたようだった。

「そつだ、探せばいいんだ。……探そう。そらまめの降る丘を。そらまめが逃げてても、魚介類が逃げても、丘ならきつと逃げやしないさ。なぜなら丘は丘で、それはつまり丘は丘だつてことなんだから。そらまめの降る丘は僕を待ってる！」

目から鱗が落ちるような発見を求める者は多いが、実際に目に鱗を入れる者は少ない。しかしいったいどこの誰の目玉から、入れてもいけない鱗が落ちるだろう。レネットは入れた。彼らは入れなかった。それがレネットと、机の前で頭をひねり続けながらも結局これといった発見を得られずに朽ちていく者たちとの違いだった。

輝かしい発見と希望とを胸にレネットは彼の凹凸多めの家に駆け戻り、机の脇の小さな靴を引っ掴んだ。ぴったりのスニーカーを脱ぎ捨てて、黄緑色のぶかぶか長靴を履いた。靴箱に立

てかけられた丈夫な傘を持って外に飛び出すと、その傘を理科の教科書に載った快晴の見本みたいに晴れ上がった空へと広げる。ほつぺたを傘の先で突かれた太陽は、不機嫌に唇を尖らせた。

「レネット君、発進—」

大きなかけ声とともに、彼は赤い傘を開いたまま思い切りスイングした。ぼつちよん、と間抜けな音を立て、赤い傘は裏返った。裏返って逆さ傘になった。それがレネットの旅の、始まりだった。

うーさん【胡散】

ペルシャに古くから伝わる珍しい植物。種子を焼いて砕いた粉は香辛料となり、魚料理に多く使われる。胡散臭い、とはこの胡散の種子を焼く匂いを言うものであり、全然怪しくなんてないんですよ、ほんとに。胡散を振りかけた魚は魔法の如く美しく変わり、人語を操るようになる。胡散で調理した魚介類の付け合わせには、主にそらまめが用いられる。原産地のペルシャには胡散をふりかけられた魚がそらまめの降る丘を指す、という伝承も存在する。近代になって胡散の粉には精神攪乱作用があることが発見された。眼球などの粘膜を通して摂取することで高揚感が得られ、自分が何か大きな発見を得たような妄想が生じたり存在しないものを追いか

け始めたりする場合がある。「とー、妖気です」
注…「うーさん」の辞書的解釈については、信頼のおける辞書を参照のこと。

ナポレオン辞苑第六版より

レネットは「A」字路の先へ、魚介類が向かった方へと旅していた。旅を始めて何度か日が昇っては昇り、幾人かの退屈な人々がすれ違って彼を不機嫌にしては去っていった。空色の道は相変わらずまっすぐで、沿道には相変わらず何もなかった。なあんにも、なかった。電信柱も、枝道も、建物も。魚介類たちが別れたあの場所にあつたきり一度も姿を現さない。そらまめの降る丘も、その手がかりも一向に見えなかった。空には雲ひとつなかった。旅を始めてから、一度だつて雲はなかった。どこまで行っても見たことのあるような景色で、見たことのない知らない場所だった。だからレネットは、気づくまで自分が知らない場所にいることに気づかなかつた。空色の道をつつか踏んで、ふと周りを見渡したら周りには何もないだらけ。知らない何もないまみれだった。どうやら彼は一本道に迷ってしまったようだった。無数の分らないに囲まれて、どうやら彼は未知に迷ってしまったようだった。誰かに未知を尋ねなきやならないな。しかし未知をどうやって尋ねればいいというの

だろう。そもそもが未知なのに。レネットは首をひねりながら歩いていった。

暫く行くと、空色の道の片隅で、男がひとりしゃがみ込んで何かを焼いているのが見えた。首をひねっていたので斜めに見えた。立ちのぼる煙が何とも胡散くさいので胡散でも焼いているのかと思えば、近づいてみると男が焼いていたのはおせっかいだった。小さな七輪の前にしゃがんで、男はおせっかいを焼いていた。ちろちろと動く炎の上でおせっかいはちぢんで丸まっていた。男はレネットが七輪を覗き込んでいるのに気がつく顔を上げた。

「よう、坊主。焼きたてのおせっかいどうぞ。ひとつどうぞだい」「いらないよ。それ、ちっとも美味しそうじゃないもの」

おせっかいは貝のようでも、石灰のようでもあった。灰色で、粉っぽくて、しかもそらまめではない。きつと不味のだろうとレネットは決めつけた。

「おじさん、そらまめは焼いていないのかい」

「ああ、焼いてないな。俺が焼くのは後にも先にもおせっかいだけだ」

おせっかい焼きの男は目の前の奇妙な少年をじろじろと眺めた。上から下まで。右から左まで。右見て左見てまた右まで。レネットから自動車でも飛び出してくるんじゃないかとばかりに注意深く。

「なあ坊主。そのぶかぶかの長靴、ぴったりのやつに換えてや

ろうか」

「いらないよ」

猛スピードでコーナーを曲がって来た拒絶に、注意深いおせっかい焼きはあっさりと同乗されてしまう。ふむ、このあっさり加減はどうにも醤油味だなと、おせっかい焼きは手にした刷毛でおせっかいに手際よく醤油ダシを塗り付けた。ぱちぱちと爆ぜる炭火の上で、おせっかいは幾分香ばしい匂いを漂わせはじめた。

「じゃあ坊主。そのへの字に曲がっちゃまった口をまっすぐにしやろう」

おせっかい焼きはぼたぼたと醤油を垂らす七輪のおせっかから目を離さずに言う。

「いらないよ。僕は自分の顔が気に入ってるんだ」

と、レネットは自分の顔をますます不機嫌に変えて拒絶する。

おせっかい焼きは、もう一度レネットをじろじろ眺め、それからいった。

「そんなら坊主。その裏返っちゃまった傘を、直してやろう」

レネットは肩に傾けた逆さ傘をくるくると回した。

「直らないよ」

「そんなことは、あるまい。俺はおせっかいかも焼けるし、傘だつて直せる」

「この傘は直らないんだ。なんせこれは『逆さ傘』だから。いったん逆さ傘になったら最後、何度ひっくり返そうと、何度裏

返そうと、逆さ傘は『さかさかさ』さ。逆ささ」

今日も空は小説の比喩みたいに晴れ渡って、乾いた逆さ傘はかさかさかさかさだった。

おせっかい焼きはきつねにままれたような顔をして、実際にきつねの顔をつまんでいた。

「はなせよう、おっさん。なんでつまむんだよう。意味わかんねえよう」ときつねは喚く。

「ああ、すまん」

おせっかい焼きは我に返ってきつねの頬をはなす。するときつねはすぐさま脱兎のごとく逃げ出して、いったいきつねやらうさぎやら油揚げやらもう分からない。そのうちに地平線の少し手前でトンビにさらわれていってしまった。

「あーれー」

さかさかさのさかさまはさかさのかさかさかまかま、などと考えながら七輪でさかまを焼きはじめたおせっかい焼きの頭上を、トンビは悠々と飛び越えていく。

「いいの？ ああきつね、おじさんの知り合いじゃなかったのかい」

「いいんだ。あいつがきつねなら助かるだろうし、そもそも俺にあづらげの知り合いなんていないからな」

それからふたりは黙りこくって、網の上で焼けていくおせっかいとさかまを見つめていた。ぴーひょろー、と遠くでトンビが鳴いていた。彼らが黙っている間に、トンビは四度鳴い

た。トンビがとんでいる高さから下の空気が全部海水になってのしかかっているような沈黙が、レネットとおせっかい焼きを沈めていた。沈んでも沈んでも、沈黙の底は見えなかった。

きつね【狐】

① イヌ科キツネ属のほ乳類。犬に似るが、体が細く尾が太いことがコンプレックスになっている。北半球の草原や森林、ネットカフェに広く分布する。夜行性といわれているが、本人は朝型になりたいと願いながら毎晩ネットゲームに没入する。ゲームジャンルは問わず、つまり雑食。トンビが喰わないこともない。「ーうどんはおいしい」

② 巧い人をだます人。あるいは胡散臭い人物。とりわけ七輪で焼いたおせっかいを売ることを商売にするような人物。おいしくない。犬も喰わない。もちろんトンビも喰わない。「ーそばもおいしい」

③ 油揚げ、いなりずしの異称。おいしいがそらまめほどではない。トンビが食べる。「ーラーメンってあるのかな」

④ うさぎのこと。おいしいがそらまめほどではない。トンビが喰う。「さすがにーラーメンはないんじゃないかな」

※ 人をつまむことが出来るきつねは、このうち②だけである。

注…「きつね」の辞書的な解釈についてこの辞書に求めるの

はあまりに酷というものだろう。

ナポレオン辞苑第六版より

だんまり合戦に耐えかねて先に口を開いたのはレネットの方だった。

「ねえ、おじさん。訊いてもいいかな」

沈黙の後遺症が、レネットの声を少しだけ掠れさせる。

おせっかい焼きは七輪から顔を上げて、

「なんだ？」

と、先を促す。ちっとも掠れないおせっかい焼きの声は、長い間沈黙することになった男の声だった。

「おじさんはここでずっとおせっかきを焼いていたの？」

「ああ、そうだな」

「ヒマそうだね。僕だったらすぐに退屈してやめたくなってしまうな。ちっとも楽しそうじゃないもの」

「そんなことあ、ないよ。この仕事にもそれなりにやりがいってのがあるんだ。おせっかいてるのは餅みたいなものね。こうして七輪の上で焼いてるだけで膨らんで、小さな親切が大きなお世話になるって寸法だ。まあ、幾分退屈なのは認めるが、こいつは俺の商売だからな。つまりそれがあきないってことさ」

その答えは大いにレネットの気に入る。彼は笑った。笑ったのは久しぶりだった。最後にそらまめを喰ったとき以来だった。

彼はおせっかきを焼くこの男に、自分と同じ「胡散臭さ」を感じとった。世界を楽しむために嘘と矛盾とにどっぷり浸かった正直者の匂いを。レネットはおせっかい焼きを知ることにした。「すれ違ふ」のではなく「出会う」ことにした。そらまめの降る丘への道を尋ねるのは、それからでも遅くあるまい。レネットは七輪の脇に腰を下ろすとおせっかい焼きに問いかけた。

「お客は多いのかい？」

「少ないな。ああ、随分少ない。ここで焼き始めてだいぶ立つが、客は坊主が最初だ」

「その間、おせっかいはずっと七輪の上？」

おせっかい焼きはささかまをひっくり返しながら頷く。ひっくり返ってさかさまのささかまはこんがりきつね色に焼けていた。遠くから「あーれー」と叫ぶきつねの声が聴こえたような気がした。空の彼方に目をやると、トンビときつねとが星になって消えてゆくのが見えた。網の上のおせっかいは相変わらずじりじりと丸まっていた。レネットには醤油味のそれが、さつきよりいくらか旨そうに思えた。

「そんなに焼いていたら、おせっかいは焦げてしまわないの？」

「焦げないさ。おせっかいてるのは一人ぼっちじゃ焼けないものだからな。俺が一人でここにしゃがんでる限り、焦げついたりはしないのさ」

「じゃあ、僕がやって来たからおせっかいは焼けるんだね」

「そうだ。坊主がいるからおせっかいは焼ける。どんどん焼ける。」

びつくりするくらい焼けるぞ。だから早く買ってくれないと焦げちまう」

「お金とるの？」

レネットはびつくりして尋ねる。

「おせっかいってのはいつだってタダだと思ってたよ」

するとおせっかい焼きは得意げにふふんと鼻を鳴らした。

「タダより高いものは無い、っていうだろ。それを特別に割安で売ってやる、ってんだ。ありがたく思いな」

レネットはポケットの中を探ると、重くて固いコインを一枚、おせっかい焼きに差し出した。どうにも腑に落ちないことではあったが、おせっかい焼きは大きな手でその胡散臭い硬貨を受け取ると、何かを待つようにレネットを見た。

「それで？」

問われてレネットは首を傾げる。おせっかいを購うのは初めてだったから、どうしたものやら勝手が分からなかった。

「え、ええと……」

まごつくレネットの頭を、おせっかい焼きはおもむろにわしと撫でた。

「な、なに？」

突然のことに慌てたレネットは、身をすくめてフードに深く顔を埋めた。おせっかい焼きは声を上げて笑った。

「いやあ。すまん、すまん。そうやっておろおろしてるのを見たら、故郷にいる息子のことを思い出してな」

「おじさんには息子がいるの？」レネットはぐしゃぐしゃになった前髪を整えながら問うた。

「そうさ。坊主と同じくらい息子がな。その子のために俺はこうしてひとり出稼ぎしてるってわけだ。俺の故郷じゃ、おせっかいなんて売れないからな」

「ここでも売れないんでしょ？」

おせっかい焼きは苦い笑みを返した。

「じゃあ、息子にはしばらく会ってないんだね」

「そうだな。長いこと顔も見えてない」

「その子は、僕に似てるのかな」

「似てないとも。俺の息子は坊主みたいに生意気じゃないし、そんなにむすっとした顔でもない」

「でも、長いこと会ってないんだよね」

「随分大きくなつたらうな」

「大きくなって僕に似たかもしれない」

「そりゃないな」

「なんでさ」

レネットは唇を尖らせる。

「そりゃあ、ないからさ」

レネットは黙り込んで火箸をいじり始めた。七輪の中の炭を突き崩すと、オレンジ色の火の粉が金網を飛び越えてレネットの頬に明るい影を落とす。再びの沈黙がふたりの上に降りてきたが、それは先ほどの沈黙ほど重くはなかった。すでに「出会

「った」者たちにとって、会話の合間の沈黙は炭火で暖められた空気程度の重さしか持たない。今度は、おせっかい焼きの方が先に口を開いた。

「じゃあ、こんどは俺が坊主に質問する番だ。坊主みたいな子供がいったいなんだってそんなおかしな格好で一人旅をしてるんだ？」

「教えない」

「教えてくれないと、おせっかいが焼けない。美味しくないぞ。生焼けのおせっかいなんて」

「教えない」

「ほんとにおいしくないぞ。不味いんだぞ」

おせっかい焼きがあまりにも深刻そうにいうので、レネットは俄に不安になった。

「……どのくらい、おいしくないの？」

「生焼けのおせっかいくらいおいしくないのさ」

片眉を上げておどけてみせるおせっかい焼きに、レネットは溜め息をついた。

「……そらまめを、そらまめの降る丘を探してるんだ」

レネットがぼつり、ぼつりと語り始めると、おせっかい焼きは満足げに頷く。

「なんでまた、そんなけつたいな丘を探すんだい」

「そらまめが、逃げ出しちゃったからさ。見つからないんだ。だから、そらまめの降る丘に行けばぎつと手に入ると思ったん

だ」

「うん、うん。逃げ出すようなそらまめじゃ、空から降ってきてもおかしくないな」

「だから、こつやつて逆さ傘を持って出かけたんだ。そらまめが降って来たら、なるべくたくさん集められるようにね」

「なるほど、それで合点がいく。長靴もそのためかい？」

「そうだよ。そらまめがたくさん積もったら、スニーカーじゃ歩きづらいでしょ」

「かしななんだってその長靴はそんなにぶかぶかなんだい。よつほど歩きづらそうじゃないか」

「これは、僕が大きかった頃の長靴なんだ」

「ずいぶん小さくなったもんだね」

「うん」

レネットは細い脛と長靴との間に溜まる、梅雨の気配みたいな暗闇に目を落とした。

「なあ、そのそらまめの降る丘ってのは何処にあるんだろうな」
「分からないよ。でも、魚介類が言ってたんだ。そらまめの降る丘で会おう、って」

「俺は魚介類は焼かない。とりわけ、おしやべりな魚介類や胡散臭い魚介類は」

レネットは自分自身の自信が地震みたいにぐらぐらするのを感じた。自分が座っている地面がまったく不確かなもので、いつしか逃げ出してしまおうような。もしも地面が逃げ出してしま

うとしたら、そらまめの降る丘もきつと逃げるだろう。

「ねえ。そらまめの降る丘は、本当に何処かにあるのかな」

レネットはさすがのような目でおせっかい焼きを見た。しかし、おせっかい焼きはすげなく首を横に振った。

「俺には分からないよ。少なくとも俺はそらまめの降る丘を見ることがない」

空色の道から空へと落ちてゆくような気持ちになって、レネットは抱えた膝に顔を埋めた。ちいさく丸まってしまわなければ、空中でばらばらになってしまいそうだった。

「おいおい、泣くなよ」

おせっかい焼きは困り果てたように言った。

「泣いてないもん」

レネットは食いしばった歯の隙間からやつとのことと言った。

「僕は泣いたりしないんだ」

「分かった、分かった。おじさんが悪かったよ」

「……ねえ、おじさん。そらまめの降る丘は、本当に何処にもないのかな」

おせっかい焼きはレネットの背中に手を置き、宥めるように、言い含めるようにいった。

「いいか……そらまめの降る丘は、ない」

レネットはいよいよ声を上げて泣き出した。

「おいおい、人の話は最後まで聞きな」

「泣いてないもん！」

「そんな話をしてるんじゃないだよ。いいか、坊主。もしも、もしも、だ。そらまめの降る丘があるとす。坊主がそれを知ってたら、そらまめの降る丘を探すか？ いいや、そんなことあ、ないはずだ。それがあるのなら、行けばいいだけだ。探す必要なんてどこにもない。俺たちはないものしか探さない。なぜならあるものはあるから、だ。そらまめの降る丘は『ない』。だから坊主は探さなきゃならない。そうだろ？」レネットの泣き声に覆いかぶせるように一氣にまくしたてて、おせっかい焼きはいくらか息を上げていた。

『ない』から探す……」

レネットはすすり上げながらおせっかい焼きの言葉を繰り返す。

「……そうだ。それでももしもそらまめの降る丘を見つけたなら、

そんなときやそらまめの降る丘は、『ある』んだ」

「そらまめの降る丘は、『ある』……あるの？」

「ああ。見つければ、ある」

レネットは両方の袖でぐしぐしと涙を拭った。

「見つけるにはどうすればいいのかな。見つけようにも、僕は未知に迷ってしまったんだ。何にも知らないんだ」

「まあ、まずこれでも喰いな」

おせっかい焼きは七輪から取り上げたおせっかいを、レネットに手渡した。

「あついで」

「焼きたてだからな」

焼きたてのおせっかいはレネットの白い指先を弄ぶようにびよこびよこ跳ね回った。レネットはおせっかいを落ち着かせるために何度か優しく息を吹きかけたあとで、おそるおそる齧りついた。ちよっぴりだけ噛みちぎって、ゆっくりと咀嚼する。「どうだ？」

「……そらまめよりおいしくない」

「不味かないだろう？」

レネットは黙ってもう一口おせっかいを齧った。

「まあ、いいさ」おせっかいは焼きは肩をすくめた。

「この道をずつと行くと、丘がある」

「丘」という言葉にびくり、と反応してレネットは顔を上げた。

「そしてその丘は、普通の丘じゃない」

レネットは目を輝かせる。

「だが、そらまめの降る丘でもない」

レネットは肩を落とす。

「その丘には、夜が来るんだ」

「夜」

落とした肩を拾い上げて、レネットは首を傾げた。

「夜って何かな」

「暗いのさ」

「怖そうだね」

「ああ、怖いこともある。だが夜の間の中ではあるものがなかったり、ないものがあつたりするもんだ。そらまめの降る丘の手がかりも、あるいは見つかるかもしれない」

「手がかりがなかったら？」

「言っただろう。なかったら、探すんだ」

それから沈黙は三たびやって来て、軽やかなコトバの空白は柔らかな風にすぐにさらわれていった。

「……うん。ありがとう」

レネットは立ち上がってズボンを払った。空色の道に土はなく、沿道に草は生えていなかったからこれは単なる儀礼的な動作に過ぎなかったが、彼がおせっかいは焼きの元から去るにはそうした一連の、お約束の動作が必要だった。

「行くのか」

「だつてこうしている間にも、そらまめは遠ざかつていっていかもしれない」

「足がないのにな？」

「魚介類は遠ざかったよ。足がないのに」

「……そうか。気をつけろよ」

「何にだい？」

「何ってことはない。坊主はただ、気をつけなければならないのさ」

「難しいな」

「抽象的な動作、ってのはいつだって難しいもんさ。簡単なことなら忠告の必要なんてないだろう？」

「抽象的な動作って、例えば次にいつ会えるか分からないよなら、とか？」

「そう。再会の約束のないお別れは、確かに難しい」

「難しいのは嫌いだな」

「なら約束するかい」おせっかい焼きはいたずらっぽい目をして唇の端を歪めた。

「それがいい」レネットも微笑みを返した。言うべきコトバはたったひとつだった。

「じゃあ、」

「また会う時には」

『そのままの降る丘で』

嘘つきな正直者にしか分からない会話の後で、彼らは別れた。この一風変わった再会の約束を耳にした一匹の魚介類が、密かにそらまめの降る丘を探す決意をしたことを彼らは知らない。知らなくても、いい。

「……しかしなんだってまあ、俺はささかまなんて焼いたんだ」空色の道の向こうでそらまめみたいに小さくなったレネットの背中を見送りながら、おせっかい焼きはひとり「ちた。」「それにしてもおかしな坊主だった」

それから網の上で焦げそうになっているささかまをささかまに つまみ上げると、ひょいと口の中に放り込んだ。

「熱っ……」

遠くでレネットが振り返ったような気がした。

「今度の週末は、家に帰ろうかな」

そして愛する息子に、語ってやるのだ。お前によく似た坊主が、そらまめの降る丘を探していたんだ、と。

今度の週末は必ず帰ろう。おせっかい焼きは心に決めた。

ところで今日が何日の何曜日かも、分からないのだけれど。

おーせっかい【御節介・おせっ貝・御石灰】

余計な世話をやくこと。他人のことに不必要に立ち入ること。しかしその不必要が、時に必要なこともある。焼く前のおせっかいを特に「小さな親切」、焼き上がって膨らんだものを「大きなお世話」と呼ぶ。おせっかいを焼くことを職業とする人は「おせっかい焼き」と呼ばれ、焼いたおせっかいを有料で売りつける。彼らが焼いたおせっかいはするめのような味がして、そらまめほどおいしくないが長期間にわたって摂取するとクセになる味である。正直に言えば、なかなかおいしい。「ーを焼かれるというのも、たまにはいいものかもしれない」

注…「おーせっかい」の辞書的な解釈について、この辞書がとやかく言うのはいらぬおせっかいというものである。

ナポレオン辞苑第六版より

ちいさな丘のてっぺんには年老いた木が一本立っていて、その木の下に座って暫く待つと、やがて夜はやって来た。まばたきのために目を瞑ってまた開くまでのわずかでかすかな間に、青空みたいに青色だった青空は、黒色よりも黒い黒色になっていた。真昼と夜の間に何かが欠けているような気がしたけれど、それが何なのかレネットは知らなかった。それから思い出したように、ひとつ、またひとつと夜空に星が灯りはじめた。星はレネットの見ているところでは灯らなかつた。星の灯る瞬間を追いかけてあちこち視線を彷徨わせると、視界から外れた空の一角で星は灯り、また灯つた。夜空はすぐに星でいっぱいになった。今にも降ってきそうな星空。「星の降る丘」なんて詩情が過ぎる。かくも美しき綺麗事。絵に書いたような絵空事。

「世の中そんなに完璧じゃないはずさ」

レネットはつぶやきながら立ち上がる。逆さ傘を肩に傾けて。

「あーれー」

聞き覚えのある声が出て、星は降って来る。きつねになって降って来る。そう、ここは特別な丘。「きつねの降る丘」だ。

レネットは傘を掲げて受け止めた。星降る夜の落ち来るきつねを捕まえた。ぼすん、という乾いた音を立てて、きつねは逆さ傘の中に収まった。

世界の何処かにはきつねの降る丘があって、そこでは毎晩の

ようにきつねが降るんだ。空から降るきつねのことを、空狐カラキツネっていうんだってさ。そらまめみいだね。僕はその、きつねの降る丘にたどり着いたんだ。

レネットときつねはちいさな木の根元に座って星を眺めた。そうすることが、この丘のルールだった。きつねの降る丘では、きつねと一緒に夜を鑑賞すること。レネットときつねは背中合わせに座った。

「ねえ。星が灯るのが見える？」

レネットは問いかける。

「見えやしないって。星はいつだって視界の外で灯るんだもの」
きつねはいった。

「おかしいな。君の視界の外は、僕がずっと見ているはずなのに」

「そちらも星が灯るのは見えないのかい」

「うん。それでも星は増えてる」

「おかしい話だね」

「でも君は笑わない」

「きつねは笑わないんだ」

「へえ。それは知らなかった」

「だって嘘だもの」

「星が灯るのが見える？」

「だから見えやしないってば」

「嘘でしょ」

「嘘じゃないよ。きつねは嘘をつかないんだ」

「へえ。それは知らなかった」

「だって嘘だもの」

ふう、と溜め息をついて宙を仰ぐと、レネットはちいさな木のちいさな枝の間で金色のまんまるが銀色の光を放っているのを見つけた。

「あ、月」

「月が灯つたのを見たかい」

「ううん」

「嘘だ」

「嘘じゃないよ。レネット君は嘘をつかないんだ」

「へえ、知らなかった」

「だって嘘だもの」

レネットは相変わらず月を眺めていたが、きつねは苦虫を噛み潰したような顔で苦虫を噛み潰したときのことを思い出していた。

「こいつはお口直しが必要かもな」

きつねはレネットの背中 で な に や ら こ そ こ そ と や り はじめた。最初は無視を決め込んでいたレネットだったが、きつねが何かを旨そうに喰っているらしい音を聞くにあたってついに振り返った。もしやそらまめを喰っているのでは、と思ったのだ。見るときつねはもぐもぐとするめを噛んでいた。きつねはレネットの視線に気づくと、するめを半分がちぎって差し出した。

「これ、ほしいか？」

「そうだね」

レネットは答えた。

他にどんな答えようがあったというのだろう。それは反駁を赦さない質問だった。黙ってするめを受け取ると、きつねがしてやったりと言わんばかりに笑むので、レネットはなんだかしてやられた気分になった。

「月はさ、違うんだ」

きつねは唐突に言った。

「うん？」

「月はね、欠けるんだ。欠けることができるんだ」

きつねはね、嘘をつくんだ。嘘をつくことができるんだ。

それは大事なこと。世界を楽しむために、大切なこと……

「だからおいらはこの丘が、この月が好きだよ」

きつねはうっとりとして月を見上げた。

「月にはうさぎもいるし」

「うさぎ、ってきつねのことでしょう」

「そうさ。あぶらげなんだ」

「君は大切なもの、なくしちやいけないよ」レネットは目を細めてきつねを見た。

「大丈夫、月なんてなくしっこないさ」きつねは元々細い目でレネットの視線を受け止める。哀しい目だな、ときつねは思った。

「僕はなくしちゃったよ。なくしつこないって思った、大切なもの」

たいせつなもの【大切なもの・大切なmono】

自分にとって何にも代え難い、重要なもの。ただひとつのもの。ただひとつはmono。たとえばそらまめのようなもの。大切なものを失うにはたつた一行を費やせば十分だが（★を参照のこと）、失ってしまった大切なものを取り戻すには、短編小説ではとても足りない。「僕の一は、どこに行ってしまったんだろう」

注…「たいせつなもの」についての辞書的な解釈を求めようとすると、あなたは「たいせつなもの」をひとつ見失っている。

ナポレオン辞苑第六版より

ぼす。

レネットは肩から提げた鞆を叩いてみる。

ちよっとした旅支度を詰め込んだちいさな鞆は、もう空っぽだった。なによりちよっとした物語を詰め込んだちいさな世界が、そろそろ終わろうとしていた。

「結局見つからなかったな、そらまめの降る丘」

「レネットはそらまめの降る丘を探しているのっ」「

「そうだよ。でも、もう家に帰らなきゃ。空っぽに、なっちゃったから」

「どっちから来たのっ」

「あっちゃ」

レネットは元来た道を指差した。夜闇の中に空色の道がぼんやりと浮かび上がって、地平線までまっすぐ続いている。空色の道以外に何もない丘の向こう側を眺めているうちに、レネットは自信がなくなってきた。今まで自分はよく見知った道、我が家から続く『どうろ』をまっすぐに歩いて来たはずなのに。旅の途中の終わりで振り返ってみれば……『どうろ』を逆さまにして見れば、それは『ろうど』。異国へと続く道だった。レネットはもう一度丘の反対側、未踏の世界に目をやった。そこにまっすぐ横たわるのはやっぱり『どうろ』。さて、『どうろ』と『ろうど』、果たしてどちらが彼の故郷の道だろう。どちらがレネットを、彼の凸凹多めの家に導いてくれるのだろうか。

「じゃあ、どっちに帰るの」

「あっちゃ」

レネットは指先を正反対に向けて先ほどとは真逆を指差した。

「僕の見知った『どうろ』は、あっちなんだから。僕はあっちへ進むべきなんだ」

「来た方向と帰る方向が真逆だなんて、矛盾してる」

「矛盾できる、のさ」

きつねは喉の奥でくつくつと笑った。

「月が欠けるように、レネットは矛盾する」

「レネットはびよん、と立ち上がって満天の星空に両手を広げる。星月夜に照らされた蒼い影もまた、天を仰ぐ。金色で銀色な月光の下で、レネットは柔らかく微笑んだ。

「ああ、そらまめの降る丘の空はこんなにも緑で、いまにもそらまめが降りそうだ。ブルーの草に覆われたその斜面では魚介類たちが再会の抱擁を交わし、奇蹟の予感に尾ひれを振るわせる。遂に約束の地にたどり着いた少年は天に向けて逆さ傘を振りかざす。ありったけの大切なものを、受け止めるために」

芝居がかったセリフの後で、レネットはくるりときつねの方を振り返った。月を背にして、レネットの顔は影に埋もれて真っ暗で、彼が笑っているやら泣いているやら伺い知ることはいない。フードの下の夜間には、例えばあるものがなかったり、ないものがあつたりするのもかもしれない。闇の底で、形のいい唇が声を出さずに動いたような気がする。

うそだよ

「これで、僕の旅は終わりさ」

「終わりやしないよ。旅はおうちに帰るまでが旅だ」

「それは辞書による言葉？」

「先生による言葉だよ」

「それは辞書による先生？」

「先生の先生による、先生さ」

「そういえばね、僕はこの旅で、ナポレオンの辞書も探そうと思つてたんだ」

「ナポレオンの……って、我が輩の辞書に、つてアレだろ？」

「不可能の文字はない、つてアレさ」

「見つかったのかい？」

「見つからなかった」

レネットは首を横に振った。

「僕の旅はそらまめを失つたことに始まり、おせっかいを焼くおじさんと出会い、そしてきつねが降って終わるんだ。たった、それだけのちつぽけな旅。そこにナポレオンの辞書が挟まる隙間なんてないよ」

「辞書つてのは、随分ぶ厚いものだからね」

隙間がないなら、辞書を置くことなんてできまい、ときつねは言った。

「旅は本棚じゃない」だから辞書はあるに違いない、とレネットは言った。

「旅が本棚じゃないなら、旅の中に辞書を見つけるのは不可能だ」だから辞書はないのだ、ときつねは言った。

「分かったよ。ナポレオンの辞書はない。だったら作ればいいんだ。僕が、ナポレオンの辞書を」

「作る？ ナポレオンの辞書を？」

「そう。僕が見たものや、知ったことを全部辞書にまとめるんだ。そらまめのことや、おせっかい焼きのことや、君のこと、何もかも」

「一人で辞書を作るなんてことができるのかな？」

「だって僕が作ろうとしているのはナポレオンの辞書だよ」

「それって、つまり？」

「僕の辞書に、不可能の文字はないってことさ」

「でもさ、ナポレオンの時代はずっとずっと昔だ。君が今から彼の辞書を書くのはおかしくないか」

「うん」レネットは顎に手を当てて考え込む。

「……じゃあ、僕が書くのはナポレオンの辞書第六版ってことにしようか」

「第六版？」

きつねはきよとんとして首を傾げた。

「そう、第六版。僕はぴーんと閃いたんだ。それは第六感。ナポレオンが使ったのは初版で、僕の辞書はその第六版さ。だつたら、矛盾しないでしょ？」

「おいらは別に、矛盾した辞書だつて構わないんだけどね」

「……そうだ！ 君も辞書作りを手伝っておくれよ」

きつねはきよとん、とした顔でレネットを見つめた。

「おいらが？ 辞書を？」

「だめかな」

レネットはもじもじとしているきつねに手を差し伸べた。き

つねは差し伸べられた手に、自分の肉球をゆっくりと重ねようとしていた、のだが。

「あーれー」

返事の代わりに、きつねは何処からともなく飛来したトンビにさらわれていってしまった。

見上げるレネットの頭上を、トンビは悠々と超えてゆく。

いつのまにか夜は明けて、空はいつも通り原色の絵の具をぶちまけたように青。夜と真昼の間に何かが欠けているような気がしたけれど、レネットは知らない。

こんなに明るくなったのに、どうして夜が明けたことに気づかなかつたんだろう。

……そうか、ひがさしていたからだ。

レネットは肩に逆さ傘を傾けていた。

ぶかぶかの長靴を履いて、空っぽの鞆を持って。矛盾と嘘とに肩まで浸かったレネットは、彼の『どろろ』を歩き出す。彼の凸凹多めの家と反対向きに、歩き出す。

「こうやってずっと歩いていけば、いつか家に帰り着くでしょう。空色の道はいつだってまっすぐなんだから。だから僕の旅はいつだって帰り道。この星を一周する帰り道さ」

ふーかのう【不可能】

可能でないこと、できないこと。たとえばそのままの降る丘を見つけたり、初版が存在しない辞書の第六版を書こうとするようなこと。「我が輩の辞書にーの文字は無い」

注…「ふーかのう」などという言葉は、結局のところ辞書の上には存在しない。

ナポレオン辞苑第六版によらない